

# 根拠を見つけるペアトークの充実によって読みの質的向上を目指す

## ～きらきら☆キッズの“きらきらきりりん”の共有～

須佐 宏

協同的な学びを実現し、読みの質的向上を目指すためには、互いに聴き合い学び合う学級風土を築くことが不可欠である。しかし、それを1年生の子どもたちがしていくことは決して容易いことではない。本研究では、1年生が聴き合う関係を築いていくためのキーワードとして“きらきらきりりん”という言葉を用いることにした。まずは1年生なりに自分の読みについてペアで自分の考えを伝え合い、本文に根拠を求めながら考えられるようにした。そのことによって、子どもたちは友達の発言を受けて「理由は。」「どうして。」と問いかけながら聞けるようになっていった。そして、「へえ、だからかあ。」「そうかあ。」「ああ。」といった共感を得られたとき、それを“きらきらきりりん”と呼ぶことにし、学級全体でそれを共有することによって学びの質の高まりを目指してきた。

キーワード：くじらぐも、中川李枝子、きらきらきりりん、ペアトーク、音読劇、聴き合い学び合う学級風土

### 1. 根拠を見つけるペアトークの充実によって

#### 読みの質的向上を目指す

今年度の個人研究テーマを「根拠を見つけるペアトークの充実によって読みの質的向上を目指す。～きらきら☆キッズの“きらきらきりりん”の共有～」とした。またセカンドテーマを「音声言語化・動作化を楽しむことを通して言語感覚を養う」とし、低学年の子どもたちが好み、また、低学年のうちにとっぷりと浸らせておきたい音声言語化・動作化を楽しむという目的をもった学習活動の中に、「吟味を生み出す対話」をつくり、そのことによって読みの質の高まりを実現しているような学習を展開していくことにした。

#### 1. 1. 聴き合い学び合う学習文化

学校提案のサブテーマである「吟味を生み出す対話」をつくっていくためには、提案の中で述べた学びの質の高まりを支える5つのもの(聴き合い学び合える学級風土・協同的な学び・プロジェクト型学習・みとりと支援の充実・自己の課題)を概ね、満たすことが不可欠である。中でも、自分を中心とした思考が優先される傾向にある1年生においては、特に、聴き合い学び合う学習文化を築くことに重きをおく必要があると考えた。

#### 1. 2. 「聞く」から「聴く」へ

1年生の子どもたちは、自分のことを伝えることに一生懸命である。言いたい・聞いてほしいという願いが大きい。まずはその思いを満たしてあげる必要がある。しかし、それだけでは学びは深まってはいかない。「聴く」ということが出来なければ新たな気づきも生まれてこない。「耳」を開くだけでなく「目」と「心」もいっぱい(両



写真1. ペアトークの様子

手を広げての「十」) つかって「聴く」ことによって新たな気づきや考えの更新が生じる。1Aの子どもたちには、入学式の日から「聞く」ではなく、「聴く」ことを大事にすることを意識させてきた。

#### 2. 1. 音声言語化や動作化における

##### 自分の考えを伝え合う。

1年生の子どもたちは、音声言語化することや動作化することを好む。よって、声に出して読むことを楽しみながら、読み方の違いに気づき、違いの意味を考えられるようにし、その理由や根拠を伝え合う機会を多く持つことにした。

#### 2. 2. ペアトークでの伝え合い

自分の読みについての考えを伝える場として、ペアトークの時間を確保し、どの子も自分の考えを伝え、聞いてもらえる機会をもつことにした。考えを伝える際には、そう考えるに至った理由を

本文に見つけて伝えられるように促した。そして、根拠を持つに至らなかった子や自分の考えを持つに至らなかった子には、ペアの考えを書き写させ、ペアの模倣から自分の根拠、自分の考えを持てるように促した。

### 2. 3. “きらきらきらりん”の共有

ペアトークを受けて全体で自分の考えを伝え合う際にも、理由・根拠に着目させた。そして、友達の考えを聞いて「へえ、だからかあ。」「そうかあ。」「ああ。」などの共感が得られたとき、それを“きらきらきらりん”と呼ぶことにし、学級全体で共有できるようにした。それがなぜ“きらきらきらりん”なのか1年生なりにそう考える理由を言葉とのつながりを追いながら明確にしていくことで、理由の見つけ方や理由の話し方を学び、対象との対話の仕方を学べるようにした。

### 2. 4. ペア学級や保護者の協力による

#### 学びのふり返り

自己の学びを客観的にふり返ることも1年生にとっては、難しいものである。よって、学びのふり返りには、好きな場面の絵を初発と描き比べたり、音読発表などのコメントをペア学級の6年生や保護者の方に書いてもらうなどして、自己の学びの成果をふり返らせるようにした。



写真2. 集会での音読劇発表の様子

### 3. 『くじらぐも』

#### ～オリジナル音読劇を作ろう！～

#### の実践より

本単元では、オリジナルのおはなし言葉を考えての役割音読、そして音読劇の発表という目的意識を持たせ、必要に応じて場面音読や動作化を楽しむことを入れたり、本文や挿絵に視点を戻したりしながら、これまでの自分にはなかったものを獲得（自己の更新）さ

せていくことにした。そして、学びの質の高まりをねらう場面では、子どもたちの学びの様相をみとりながら、言葉に着目させる発問を用意し、吟味を促していくことにした。吟味を促す場面では、子どもたちが同じ土俵で、同じ視点にたって、理由や根拠を話し合えるように、課題を焦点化することを意識した。

以下に本時において言葉の吟味がなされ、学びの質が高まったと考える場面を3つ挙げ、事項で考察することにする。

#### 【場面Ⅰ】

T：ほかの聞いていいですか。

C10：はい。「くもの上はたのしかったね。」です。

C：理由は。

C：理由は。

C10：理由は、3場面で楽しく遊んでいるから入れた方がいいと思う。

T：今のはどうですか。

C：いい。

C：いいと思う。

T：いいですかあ。はい。じゃあ14番まるしてください。

C7：ちょっと待って先生、あのねえ…

T：はあい。

C7：14番やめたほうがいい。あのね、14番入れるんやったら…

T：聞いてよ。

C7：ここの13番にして「くもの上は」に変えた方がいいで。

C：理由は。

C：理由は。

T：理由言うたげて。

C7：理由は、いつもよう、みんなよう、どこどこはたのしかったよとか言ってるやん、みてみてきいてとかでも…

C8：いや、ドッジボールが楽しかったですつて…

T：(途中で話し始めたC8に向かって)聞いて、聞いて、聞いて。

C7：ドッジボールが楽しかったですでもよ、これはよう、ほんまのお話なんやからよう、プロの人が書いてるお話なんやからよう、それにあったお話みたいなこといれやなあかんからよう、自分がプロになったつもりで書いた方がええんやで。C8:いれやんとだめなん。C7ちゃんに聞くけど。

#### 【場面Ⅱ】

T：いっかいちょっとおろしてくれるかな。まだね、いいところがたくさんあるんだけど、さっきC8くんがねえ、「げんきよく」ってね、

書いてるよってね、言ってくれたんだけど、先生ね、これなんかおかしいなって思うんよ。

C3：なんで。

T：だってねえ、教生先生がかえっていくときに、教生先生はどうだった。

C：さびしそうに…

T：さびしそうやったな。林先生はどうだった。

C：泣いてた。

T：泣いてたなあ。

C8：でも「くじらぐもはげんきよく」って中川李枝子さんが考えたんやん。

T：そうなんやけどよ。

C8：だから「またげんきよく」でいいやん。

T：なんで「げんきよく」なんよ。

C8：でもそれ消したらだめやん。

T：なんで「げんきよく」なんよ。

C：ええ…

(中略)

T：C8くん。

C8：ええと、教生先生だって、さようならしてからその次に泣いてなんか来てなかったやん。だから、くじらぐもだってまた会えるよって思ってるやん。で、教生先生だって、お別れ会の時は泣いてたけど、それから何回か来て、その時は泣いてなかったやん。だからくじらぐもだって、また会えるよって思ってる。

C28：でもよ、でもよ、でもよ。

C7：C8くんに質問。

T：はい、どうぞ。

C7：でもよう、その時はかなしいやん。だからくじらぐもよ、絶対1回目やで、だって子どもたちびっくりしてるやん。

C15：もういっこ、それは、子どもといっしょにあそんでうれしいから。

C5：ああ…

T：ああ…って今だけ言うたん。

C3：まだうれしい気持ちが残ってることか。

T：C5ちゃん、ああ…って思ったん。

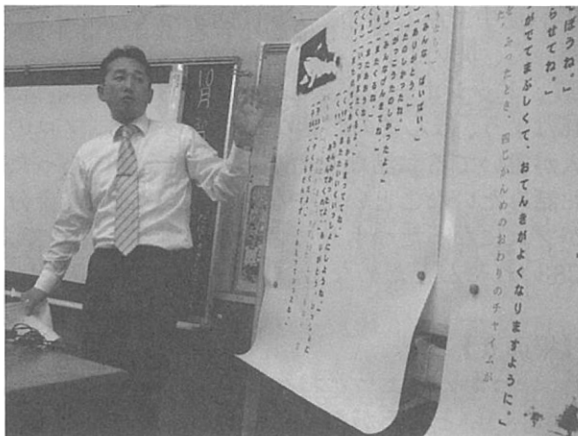


写真3. 本時で“焦点化”を図ろうとする様子

C28：まだある。

C16：C3ちゃんたちもやで。

C：ああ…

C28：まだある。

T：あああ…か。

C28：まだある、まだある、まだある…

T：C15くん、…

C2：きらきらきらりん。

T：今のどこのこというてんの。

C15：4場面。

T：4場面どう。

C：ああ。

C：いいです。

C3：まだ気持ちが残ってるってことかあ。

T：まだその時の気持ちが残ってる…

C12：げんきそう。

T：げんきそう、だからかあ。

C2：だからげんきそう。

C12：飛びはねてるもん。

### 【場面Ⅲ】

T：今C15くんは、なんていう言葉つかったっけ。(小さい声で)もういっかい言うて。

C15：さっき、子どもといっしょにあそんだから。

C：さっき

C：さっき、子どもといっしょにあそんだから。

C：子ども

C：だから



写真4. 本時で言葉の吟味をする様子

T：いい言葉つかったで…聞き逃したなあ。

C15くん、どんな言葉考えてあったっけ。

C15：……

T：この中でC15くんのどれかな。

(中略)

C15：うんわかったよ。ありがとう。いっしょにあそんでくれて。

T：これ。ほら。この中になんかすてきな言葉ないか。

C: ある。  
 C7: また。  
 C10: あそんでくれて。  
 C: わかった。  
 C: わかった。  
 C12: ありがとう。  
 C2: ありがとう、いっしょにあそんでくれて。  
 C28: 手あげていってくれ。  
 T: 手あげていってくれ。もう聞こえてしもた。「ありがとう。」なんでありがとう。  
 C15: いっしょにあそんでくれたから。  
 T: いっしょにあそんでくれたから。  
 C7: いや、これいっしょにあそんでくれたんじゃないと思う。  
 T: ええっ。  
 C8: いっしょにあそんでないやろ、それ。  
 T: いっしょにあそんでくれたんじゃないん。  
 C12: いっしょにあそんでない。その理由、その理由。  
 T: ええっ。C14 ちゃん。  
 C14: だってさあ、くじらは子どもたちのせただけやん。  
 C7: ちがう、1 場面にかくされてる。  
 T: C10 ちゃん。  
 C10: はい。ええと、4 場面では、くじらがみんなのをせてるから、みんながあそんでるだけやから、くじらとはあそんでない。  
 C: それじゃないんよ。



写真5. 聴き合い・伝え合う子どもたち

T: えっ、ちがうっていう人いる。ちがう、ちがうって。くじらなあそんでいるよっていう人いる。  
 C27: まねっこあそびしてるやん。だからいっしょにあそんでない。  
 C: そう、そう、そう、そう。  
 C7: まねっこあそびしてるやん。  
 T: なんでまねっこあそびしてるの。  
 C27: 学校がすきやから。  
 T: 学校がすきやから。C10 ちゃん、なんて、

なんて。  
 C10: ここにね、「あのくじらはきつと学校がすきなんだね。」って書いてあるから。  
 T: C3 ちゃん。  
 C3: あのさ、子どもたちのことがすきやからまねしたんじゃない。きらいでまねする人とかおらんやん。  
 T: C15 くん。  
 C15: また4 場面に、みんなはうたをうたいました。って。  
 T: みんな。  
 C3: 楽しいから歌うたう。  
 T: 楽しいからよ。誘ってくれたんよ。な。  
 C3: だから楽しい。  
 T: いっしょに遊びたいよう、おいでよう、おいでよう、のりなよう。って。  
 C2: ここへおいでよう、って、おいでようってあるやん。  
 T: ありがとう。って元気よく帰って行くときにどんな言葉言うやろ。くじらさん、ありがとうの他になんか言葉でてくるのいやろうか。ここにまだ書いてない言葉やけども。  
 C2: いっしょに。  
 C7: またいっしょにあそぼうね。  
 T: またいっしょにあそぼうね。なるほど C16 くん。  
 C16: またいっしょにあそぼうね。  
 T: またいっしょにあそぼうね。  
 C28: 言われたあ。  
 C12: またこんどいっしょにあそぼうね。  
 T: またいっしょにあそぶんやな、お友達になってるもんな。  
 C28: ええとね、まだ、(1 場面の挿絵を指しながら) このときはたぶん友達にならなかったと思う。まねしてるだけやから。最初やから。でも、(2 場面の挿絵を指しながら) ここで子どもたち「おうい。」っていうてるやろ、ほいじゃあさ、ここで (3 場面の挿絵を指しながら) かぜが押されて、4 場面でのせてもらって遊んでるから、だから、もうくじらはうれしいと思う。  
 T: C3 ちゃん、最後にしましょう。ちょっと時間がきてしまいました。  
 C: ええっ。  
 T: ごめんなさい。  
 C: えええ。  
 C3: 2 場面から友だちになってると思う。なんでかという、あのさ、もうさ2 場面でき、だってさ、みんな、あのくじらはきつと学校がすきなんだね。って…  
 C8: ああ、言われたあ…

C3：書いてるからさ、わたしたちのことがすきっていうことなんちがうん。

C16：そんでわらってるし。

C2：すきなんだねってあるもん。

C16：そんでわらってるから。

#### 4. 授業の考察

本時における言葉の吟味について考察する。本時は、物語の最終場面でくものくじらが帰って行く際に、子どもたちがくものくじらに呼びかける言葉とそれに答えるくものくじらの言葉を考えることが学習課題であった。音読劇を作るという目的意識をもって、役割音読や動作化をして楽しみながら前場面までの言葉づくりをしてきた子どもたちにとって、本時で最終場面のおはなしことばを考えることは、「1A オリジナルくじらぐも」の完成を意味していた。そして、それは、本実践の終末に、全校集会での音読劇発表、さらには和歌山市の暗唱大会への出場という目標を持っていた子どもたちにとって、十分「自己の課題（＝やってみたい。おもしろそう。解決したい。考えてみたい。）」となりえていたと考える。

子どもたちは、自分たちと同じ1年生である登場人物の子どもたちに同化して読み進めてきたため、楽しかった空の旅を想起して「たのしかったよ。」「またあそぼうね。」「ありがとう。」といったおはなし言葉を考えていた。一方で、くものくじらのおはなし言葉としては、子どもたちのおはなし言葉に対応する形の「たのしかったね。」「またくるね。」などの言葉は多数出ていたものの、友達になってくれて、「うれしかった。」「みんながよるこんでくれて「うれしかった。」「うれしくてげんきがでるよ。」など、一年二組の子どもたちとの関係が深まったことによるうれしさから発する言葉はほとんど出ていかなかった。（それにつながっていくであろう言葉は児童15・22・25に見られた。）本時では、前半で20段落に入りたい子どもたちの言葉の理由を焦点化することによる吟味（ポイント1）を重ねながら、登場人物の心情からくるおはなし言葉を探る吟味（ポイント2）によって学びの質の高まりをねらっていた。【場面Ⅰ】は、私が、「プチ吟味」と呼んでいるポイント1の吟味の場面であるが、C10やC7の発言を受けて、「理由は。」「理由は。」と尋ねていたり、C10やC7もそれを受けて「理由は…」と発言を続けていることが見受けられ、子どもたちの聴き合う姿も見られたことなどから判断すると、言葉の吟味が行われたことによる学びの質の高まり

があったと言っていいのではないだろうか。【場面Ⅱ】は、授業の後半、事前に子どもたちから挙げられたおはなし言葉が、本編の内容にあうものであるかを全体で話し合ってきたところ（ポイント1の吟味が続いてきたところ）で、ポイント2の吟味を促すために教師がいったん子どもたちの発言をとめ、C8が授業の前半に触れた発言「またげんきよく」を取り上げて焦点化した場面である。わかれの場面であるにもかかわらず、元気に泳いでいくくじらぐもの様子から、子どもたちとくじらぐもの両者の関係の変化をつかませたいと考えての発問であった。C15の「もういっこ、それは子どもといっしょにあそんでうれしいから。」という発言を受けて、C5がああ…という感嘆の声をもらしている。そうして、すかさず、C16が「C3たちもやで。」と伝え、C2の「きらきらきりりん」という発言につながっている。ここでは、子どもたちが、互いの言葉をしっかりと受け止めながら伝え合うことができおり、C3の「まだうれしい気持ちのがこってるってことかあ。」によって、C2やC12の挿絵を再確認しての発言「元気そう。」「だから元気そう。」「飛び跳ねてるもん。」を導いている。この場面は、それまで気づくことのできなかつた読みに気づけた場面であり、学びの質が高まったと考えることができるであろう。【場面Ⅲ】は、【場面Ⅱ】での気づきをもう一つ深めるために、教師が再度C15の「うんわかったよ。ありがとう。いっしょにあそんでくれて。」という言葉に焦点化を図った場面である。ここで、教師は、一年二組の子どもたちとくものくじらとの関係の変化を押さえた



写真6. ペアで言葉の吟味をする様子

いと考えていた。そのため、引っ張り気味の言葉かけが見られる。加えて、C7から続く「くじらぐもはいっしょに遊んでない。」という発言から思わぬ方向へと展開してしまっている。幸い、授業の最終場面でC28、そしてC3が、両者の関係の変化を捉える発言をしたことで、それを共有するに至り、学びの質が高まったと判断するこ

とができたが、結果的にそうではあったが、子どもの「いっしょにあそぶ」というとらえを認識できていなかったことが原因であったように思う。

## 5. 成果と課題

学びの質を支える5つのものの中で、最も重点をおいてきたのが聴き合う関係づくりである。話すこと以上に聴くことを徹底して意識させてきた。本時での聴き合う姿にも見られたように、1年生ではあるが、その点は十分満足できるまで達していたように思う。手立てとしては、よい聞き手を育てることを日々心がけてきたことが挙げられる。友達のよさや友達の気づきについての発言を常に全体で共有できるように投げ返し、褒めることによって、聴き合う関係ができてきたのではないかと思う。また、秋田先生にも指摘していただいた居方（ポジショニング）として、友達に向けて話せるようにジェスチャーで示すことを続けてきた。みとりについては甘さを感じるが多かった。本時でもみとりの甘さから、適切な投げ返しができなかった。ポイント1の吟味のなかで、ポイント2につながる場面があったにもかかわらず、それをやり過ぎしてしまっている点は反省すべき点である。協同的な学びとして、ペアトークは意識して入れてきた。1年生の現時点では、ペアとしての学習が機能するように、教師側で意図的にペアを作った。本時ではもう少し時間的に余裕をもってペアトークの時間設定をするべきであったと思う。ただ、時間の確保が難しいとも感じている。自己の課題については、本単元では、最終に音読劇の発表という目的意識を持ち、どんな「おはなし言葉」が適切であるかを考えながら学習を進めることによって、自ずと物語り世界を読んでいけるという学習を展開した。最終目的である音読劇の披露（集会発表&和歌山ビッグ愛での子ども暗唱大会）を意識した発言が授業の随所に見られたこと、また、本時のようなおはなし言葉を決める話し合いで、本文に立ち返りながら話し合いができたこと（前述のようにこれを私の中ではプチ吟味と呼んでいた。）から、十分子どもたちにとって自己の課題になり得ていたと感じている。その点で、大単元構想での課題意識という1年生には困難とも思える部分を本単元はクリアできていたと思う。しかしながら、その反面、その学習課題を子どもたちが納得できるところまで話し合わせることは、時間的にも、子どもたちの力的にも無理があることも感じた。低学年、特に1年生においては、私がプチ吟味と呼んでいた部分

に十分吟味が存在するのではないかとも思う。

吟味については、前述のように、指導者が考えていた発問「さようならするのに、くじらぐもさんがげんきよくかえっていったのはどうしてだろう。」の出どころを見誤ったため、学習の流れの中で自然な吟味（学びの質の高まり）を生み出すことができなかった。子どもたちの前半の話し合いの中には、そこにつながっていけないものがあつた。そこを適切にみとり、つなげてあげられなかったことが悔やまれる。協議会でも、「吟味は教師が作るのか、子どもが作るのか。」という発言があつた。むろん、教師が子どもたちの学びに寄り添いながら意図して作っていくのであるから、子どもたちと教師が一緒に作っていくということになる。子どもたちの学びの中にある吟味へとつながるポイントをいかに的確につかみ、それを投げかけられるか、焦点化のポイントをもう少し探っていく必要があると感じている。



写真7. 子ども暗唱大会での発表の様子

### 【参考文献】

- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 国語編」（東洋館出版）
- 須佐宏（2010）「平成22年度教育研究発表会要項」（和歌山大学教育学部附属小学校）
- 中川李枝子（1982）「本・子ども・絵本」（大和書房）
- 西郷竹彦（2002）「新教科書指導ハンドブック 小学校低学年の国語」（明治図書）
- 阿毛久芳（2001）「文学の力×教材の力 小学校編1年」より くじらぐも くごっこ遊びへ（教育出版）
- 深川明子（2001）「文学の力×教材の力 小学校編1年」より 「みんな」なかも『くじらぐも』（教育出版）